

悩み・苦痛の逆療法

第1部 解脱の真理の発見

(30) 煩悩の解脱は聖人になることか

昔から、禅僧の中で大悟した僧は高僧として崇められている。そして、禅宗は小乗仏教（逆に大乘仏教といわれることもある）であり、皆が救われる大乘仏教（例、浄土真宗）と違って、限られた人しか救われないとも言われる。聖人とは、「知徳が非常にすぐれ、心が正しく、万人が仰いで師表とすべき人」である。このような聖人しか悟れないのであろうか。他の項でも説明しているが、悟りには段階があり、中国では十牛図として表現されている。そして、見性（自己に本来、具わっている心性を徹見すること）とは、第六段階であるが、第一段階の一つの悟りの段階である。第十段階に到達することは、望ましいことではあるが、多くの人にとって必ずしも必要ではないのである。

そして、悟りの道しるべとして、苦痛を味わい噛みしめ更には強めることが重要なのであるが、これは聖人でなくても、誰でもできるのである。むしろ、聖人ではなく悩み多き人こそ、多くの煩悩の苦痛を体験することができるのであるから、見性する機会は多いのである。この点、大乘仏教の典型である浄土真宗の親鸞の「善人だって救われるのだから、悪人はなおさら救われる」という言葉と相通ずるところがある。

更に、見性して悟った人は、聖人かといえ、それは必ずしも当てはまらないのである。見性しても、煩悩を持つ人間であることは変わらないのであり、悟りすました聖人となることではない。煩悩もあり、多くの欲も持った人間なのである。

違いは、その煩悩の苦痛を味わい噛みしめ更には強めることにより、煩悩に耐えやすくなり、だんだん煩悩の苦痛が弱まって、くもりなき悟性が働き、煩悩の自己主張と、それを抑える自己抑制との調和ができるようになり、やがて煩悩の希薄な人になるのである。

これは、孔子の『論語』で言う、「七十にして心の欲する所に従って、矩を踰えず（七十歳になり、思うままにふるまって、それで道はずれないようになる）」ということと近いのである。

そして、悟りの最終段階である第十図ともなれば、悟りの体験を日常生活に生かすとともに、自分だけの悟りの境地に安住することなく、他者の救済をも目指すようになる。このようになれば、聖人君子に近くなるのである。しかし、第一図から第六図の悟りでは、聖人君子でもないし、単に苦痛を味わい噛みしめ更には強めるだけなのである。

これを短歌にすると、

煩悩を 解脱すれども 煩悩は
現れ出でて ただ薄らぐのみ

となる。

以上述べたように煩悩を解脱することは、聖人・君子になることではない。しかし、自分自身にとってみて、煩悩を解脱して、煩悩の苦痛から逃げようとか苦痛を抑えるという自然の法則（心の法則）に反することをしなくなり、単に煩悩の苦痛を噛みしめ味わうこととは、天国と地獄の違いがある。従って、煩悩を解脱することは、自分自身が地獄から天国に救われるようなものであり、仏教で言う「成仏する」ことであり、「唯心の浄土」の実現になるのである。